

## ラテンのリズムの楽しさを・・・



▲Copacabana/Barry Manilow

10月号ですね。私はこの季節限定で唄う歌があります。Johnny Mercer未完の遺作に、Barry Manilowが曲をつけた“When October Goes”です。切なくて美しく大好き!若い頃にBarry Manilowの“Copacabana”がヒットしていて、ラテンのリズムの楽しさを教えてくれました。それからアルバムを聴き始めたのですが、彼は最高に素晴らしいですね。そうそう!前号からの続きはラテンのお話でしたね。“BESAME MUCHO”を歌うためにYOSHIRO広石先生にスペイン語を教えてくださいました。YOSHIRO先生は、1940年生まれの国際的なラテン歌手。最初はジャズ歌手として米軍キャンプで唄っていたのにラテン曲をうたったら大いに盛り上がり、いつしかラテン歌手になっ

たそうです。1965年にベネズエラのTV局に招かれたのを機に中南米で大人気になり、長年、ラテン本場の地で活躍されてきました。ひょんなことから巨匠に出会って教えていただけることになりましたが、当初“BESAME MUCHO”だけが唄えれば良いと思っていたのに、先生の間力なのかしら、今もラテンの勉強は継続中です。唄える曲が増える楽しみというよりも、中南米世界のお話や、現地の方の想いがこもった言葉のニュアンスなどの、歌詞の背景をたっぷり解説してください。本当に実のあるレッスンです。ラテン曲もジャズ曲を歌うときも、やはり背景を想像したいです。私にとってどちらも、国も違えば時代も違う音楽です。まったく同じようには理解できませんが、差別的な毎日に苦しむ中から産まれた音楽であることは忘れないようにしたいと思っています。それと先生に出会っていちばん嬉しかったのは発音のストレスから解放されたことでした。先生はスペイン語、ポルトガル語、イタリア語も大丈夫だよと言ってくれたのでボサノバ(ポルトガル語)のチェックをお願いしたのですが「ポルトガル語はあなたの方がうまいね～」と言ってくれました。要するに、この辺の言葉は少しくらい発音が違っていても通じるのです。以前、英語の発音を教えてくれた先生も「会話の流れ

を考えると、何のことを言ってるのかわかる」と。私は英語教育に一生懸命だった学校の出身だったので、それが役に立ったと思われがちですが、実は逆に英語に大変なコンプレックスをいまだに持っています。相手の言っていることは大まかに分かるのですが、喋ることが怖いのです。英語の試験みたいに間違うかもしれない…それが怖い。でも勉強ではなく、おおらかに生きた生活の言葉として使っていんだよと、英語発音の先生もYOSHIRO先生も教えてくれたので今はストレスまったく無しです。とはいえ、そもそも日本語のお喋りも下手なので、まして外国語でペラペラ喋るなんて、それは無理ムリ～。



2005年12月14日、ジャズシンガーとして待望のリーダーアルバム「NEARNESS OF YOU/星乃けい」、2006年12月20日「IN A SENTIMENTAL MOOD/星乃けい」をLP、CDでリリース。オーディオファン、ジャズファンから高く評価支持される。